

否定的文脈と否定極性項目に関する一考察

－ “not at all” vs. 「全然」を中心に－

有光 奈美

京都大学

naminette@msf.biglobe.ne.jp

1. はじめに

一般的に英語の “not at all” は、日本語で言われるところの「全然～ない」と照らし合わせて語られることが多い。“at all” は 否定極性項目 (Negative Polarity Item (NPI))¹の一つであると言われ、否定的文脈を必要とする。「全然」は “at all” と非常に近い部分を持ちながら、大変独自の用法を有している。本研究は、“at all” と「全然」を照らし合わせながら、明示的な否定辞と呼応しない「全然」の存在に注目する。そして、これまで見逃されてきた否定的共感という概念を否定的文脈に含められる可能性を指摘し、その背景に存在している非明示的否定性を解明する。

2. “at all” と「全然」に関する着眼点

2.1 明示的否定性における “at all” と「全然」

“at all” と「全然」は、多くの場合、次のように明示的な否定辞と呼応して、文を構成する。

- (1) a. He has no friends at all.
b. *He has a friend/ some friends at all.
- (2) a. 彼は全然友達がいらない。
b. *彼は全然友達がいる。
- (3) a. He is not honest at all.
b. *He is honest at all.
- (4) a. 彼は全然正直ではない。
b. *彼は全然正直だ。

いわゆる肯定文の中で “at all” と「全然」をいきなり用いるのは非常に不自然であ

¹ 代表的な NPI には以下のようなものが挙げられる。英語であれば、any, anything, anybody, a red cent, bat an eyelash, budge an inch, care a hoot, cut any ice, drink a drop, give a damn, have a hope in hell, lift a finger, say a word 等が挙げられる。日本語であれば、何も、少しも、ちっとも、つゆさえ、ゆめにも、一つも、一滴も、等を挙げる ことができる。詳細はセクション 3 で取り扱う。

り、“no”や“not”、「ない」等の明示的な否定辞を有する否定文の中で用いられるのが一般的である。

2.2 形態的否定性における“at all”と「全然」

語が形態的に否定性を有することがある。広く知られている否定接頭辞や、あるいは否定的な意味を有する接尾辞を有している場合である。このとき、“at all”と「全然」は、どちらもその形態的否定性とは呼応することができず、次のように不自然な用法となる。

- (5) a. He is not happy at all.
b. *He is unhappy at all.
- (6) a. 彼は全然幸せではない。
b. *彼は全然不幸せだ。
- (7) a. He doesn't agree with me at all.
b. *He disagrees with me at all.
- (8) a. 彼は全然私に賛成しない。
b. ?*彼は全然私に不賛成だ。
- (9) a. This gas has no color and scent at all.
b. *This gas is colorless and scentless at all.
- (10) a. このガスは全然色においもない。
b. ?*このガスは全然無色無臭だ。
- (11) a. This dog is not harmful at all.
b. *This dog is harmless at all.
- (12) a. この犬は全然害がない。
b. ?*この犬は全然無害だ。

これらの例文 b はそれぞれ形態的否定性を有する文の例であるが、日本語においては、世代によって、これら b の用法を容認することがある。容認の度合いについては、世代間の差だけではなく個人間の差も関係している。しかし、少なくとも、英語ではかなり厳しく不自然と感じられる用法が、日本語においては、寛容な面を見せている点に注目したい。

2.3 肯定文における“at all”と「全然」

肯定文においては、「全然」についてのみ、次のような現象が見られる。

- (12) (身長の話をしていて)

黒柳徹子「166 で宝塚では小さいの？」

真矢みき「いや、もう、かなり、全然小さいですね」(1999.4.21「徹子の部屋」)

(12)に見られるような「全然」の用法では、どこにも明示的否定辞は存在していないのに「全然」の使用がごく自然である。このような用法は“at all”においては、見つけられない。果たしてこれはどのような理由によるものだろうか。この詳しい分析についてはセクション4で取り扱うことにして、ここでは特に対話の形を取っていることにまず注意を促したい。対話においては、話し手と聞き手の相互の心的状況が非常に重要である。相手の心的状況は自分の心的状況と照らし合わせたときに同じなのか、差異があるのか、それはどのような差異なのか、といったことについて考察する必要がある。対話の機能はさまざまにあるが、この(12)における「全然」の用法では、相手の心的状況を「訂正」しているようだという点に注目したい。最初の黒柳徹子の発話、「166で宝塚では小さいの?」を言い換えるとすれば、「166センチの身長というのは、一般的には大きい方だと思われるが、宝塚ではそうではないのでしょうか」とでもなるだろう。真矢みきはそれに対して「今、黒柳さんが166センチの身長に対して持ってらっしゃる考えとは違って、宝塚では、166センチの身長は全然大きくありません」といった内容を伝えるのに、「いや、もう、かなり、全然小さいですね」と最初の「いや」で相手の心的状況を訂正し、さらに「全然小さい」と続けているのである。「小さい」はもちろん明示的否定性を含んでいない。真矢みきは、ある身長基準に対して166では「かなり小さい」と一度期待・典型値との比較をして、そのあとで、「期待されている身長に対しては全く大きくない」という意味で、「全然」を用いている。言い換えれば、「全然小さい」という言語の表層レベルでは肯定文に見える文の中で「全然」を用いているのである。この「全然」は、「期待・典型値には達していない」という否定性を強調する目的で使用されているのである。この(12)のようなやりとりは日常言語において珍しいものではない。すると、何か他に「全然」を一見肯定文のような中で用いることを許しているような否定的文脈というものが、存在しているのだろうか。そのことについて以下で考察する。

3. NPI と否定の文脈

3.1. NPI (Negative Polarity Item) 否定極性項目

NPI とは何か、van der Wouden (1994:5) は、次のように定義している。

Definition: Negative polarity items (NPIs) are expressions which can only appear felicitously in negative contexts.

Definition: Positive polarity items (PPIs) are expressions which cannot felicitously appear in negative contexts.

さらに、代表的な NPI とは、any, anything, anybody, a red cent, a damn thing, half bad, anymore, either, ever, in years, whatever, whatsoever, yet 等の他、小さな量・程度を表す名詞を含み持つ、a bit, a single bit, bat an eyelash, bother to, budge, budge an inch, care a hoot, cut ice, cut an ice, drink a drop, give a damn, give a bite, have a hope, have a hope in hell, hold a candle to, lift a finger, say a word, といったようなもの、さらには、大きな量・程度を表す名詞を含み持つ at all, much, 等を挙げることができる。

NPI を表現するものを構成している要素について、いくつかの特徴的な分類を与えることが可能であるが、このことについては今後の研究としたいが、ただ、今の時点で言えることは、日常生活において “bat an eyelash” でいうところの「一回まばたきする」ことや、“drink a drop” でいうところの「一滴を飲む」ことというのは稀であって、実際にはそれよりも多い回数・量・程度の何らかの動作をしている。したがって、このようなことはあくまでもある段階性における、ゼロ（すなわちこのような多くの場合における強い否定）と対比させる対象として、量・程度の表現が NPI を表現し、用いられているということなのである。量・程度表現においては段階性が重要であり、「ゼロ」との対比の中で否定を用いたり、逆にもう一方の極である「大量」との対比の中で否定を用いたりしているといえる。

NPI とは、本来、否定環境の中で現われると言われるものである。“at all” と「全然」はそれに該当しているように見える。少なくとも “at all” についてはそのように言うことが可能に見える。しかし、「全然」については疑問が残る。「全然」は果たして NPI なのか、そうでないのか、あるいは NPI の中でも特殊なタイプのものであるのか、以下で論じる。

否定環境の詳細は十分に明らかになってはいないが、吉村 (1999:18) は「この NPI 本来の持つ強さというのは、明示的否定辞の “not” がある文脈にしか現われない NPI が最も強く、容認される範囲が広くなるごとに弱い NPI だと考えられる」と指摘している。そうすると「全然」は少なくとも最も強い NPI ではない。

3.2. 否定的文脈

否定の文脈については次のような分類を与えることができる。太田 (1980: 281-285) は、NPI が否定の文脈の中で特徴的に現われることを指摘し、以下のような否定の文脈を挙げた。すなわち、顕在的否定の文脈（文中に明示的否定辞 “not” などを有する文）、潜在的否定の文脈（文中に明示的否定辞を含まないが、“afraid,” “object” などを含む。あるいは、

「…するには～すぎる」を示す “too ~ to …” といった構文）、比較構文、間接疑問を含む疑問文、If 節、Before 節、事実と反する仮定である。また、(Horn 1970:318) は、否定の叙実述語の補文 (John didn't realize that he had swallowed any marbles.) も否定の文脈を有することを指摘している。しかし、本稿の (12) の対話に見られるような「全然」に関しては、上に挙げられている否定の文脈以外の要素が関係しているようである。

4. 否定的文脈における “at all” と「全然」

4.1. 「全然」以外の NPI のふるまい

英語の NPI としては、“any” や “a bit,” “bat an eyelash,” “lift a finger,” “say a word” 等が挙げられることや、その性質がいくつかに分類できそうなことについて、既に上で触れた。

また、「全然」が肯定文のように見える文の中で用いられることができる現象については、2.3で紹介した。では「全然」以外の類似の表現であればどうか。

日本語においては、否定辞と呼応する陳述副詞として川端(1983: 25)が「つゆさえ、全然、少しも、ちっとも、めったに、ほとんど」などを挙げている。しかし、この中に副詞によって、強いNPIであるといえるものと、弱いNPIのように見えるものが混在している。

- (13) a. 少しもおもしろくない。 / b. *少しもおもしろい。
 (14) a. つゆさえ想像しなかった。 / b. *つゆさえ想像した。
 (15) a. チョコレートはめったに食べない。 / b. *チョコレートはめったに食べる。

これらは非常に強いNPIsであり、明示的な否定辞「ない」が存在していない文においては極めて不自然であると感じる。

しかし、「全然」はこれらの副詞と同じだろうか？と考えると、そうともいえないような場合が現れる。特に対話例にその特徴が現われる。

- (16) (その本はおもしろかった？ / その本はおもしろくなかったでしょう？と聞かれて)
 a. 少しもおもしろくないよ。 / b. *少しもおもしろいよ。
 (17) (そのことについて少しでも想像していたのか？ / そのことについて少しも想像していなかったでしょう？と聞かれて)
 a. つゆさえ想像しなかったよ。 / b. *つゆさえ想像したよ。
 (18) (チョコレートはよく食べるのか？ / チョコレートはめったに食べないよね？と聞かれて)
 a. めったに食べないよ。 / b. *めったに食べるよ。
 (19) (この本はおもしろいか？と聞かれて / この本はおもしろくないよね？と聞かれて)
 a. 全然おもしろくないよ。 / b. #全然おもしろいよ。

「少しも」、「つゆさえ」、「めったに」においては、質問が肯定疑問文であっても否定疑問文であっても、bの返答は極めて不自然である。

その一方で、(19)の例において、「この本はおもしろくないよね？」と否定疑問文で聞かれた場合にあっては、(19b)のような返答の容認度は高い。現代の若者言葉ではごく自然に多用されている。どのような環境において、「全然」は明示的な否定辞がなくとも、自然に使用・理解されているのか、そのメカニズムを以下で解明する。

4.2. 対話文に見られる「全然」

たしかに、突然次のような文を聞くと違和感がある。

- (20) a. *彼は、この国に全然友達がいる。(=2b)
 b. *彼は、全然正直だ。(=4b)

しかし、対話において、肯定文で「全然」が用いられていても、ごく自然なことがあるのは(12)で示したとおりである。他にも類似の例を挙げることができる。

- (21) (コンサート中に事故にあった歌手がレポーターに質問されて)
 レポーター「どうですか、具合は」
 歌手「全然大丈夫です」
 (22) (秋田県の日本酒飲酒会で試飲しているところを、「どうですか」と尋ねられて)
 「私は新潟の出身なんですけど、全然、秋田のお酒にもおいしいのがいっぱいあって」
 (23) (素人が和菓子職人のところで和菓子作りの一日体験をした後、感想を求められて)
 「和菓子の職人さんっていうと厳しいイメージばかりあるけど、全然優しいわ」

これらの対話に共通して見られるのは、相手の心的状況であるとか、話し手の以前から持っていたイメージなどに対して「訂正」をするであるとか「異議を申し立てる」といったような発話において「全然」が用いられているということである。「あなたはこのように想像しているかもしれませんが、本当はそうではありません」であるとか「私は以前そのように想像していましたが、実際にはそうではありませんでした」といったような場合である。このような否定性はこういったものなのか、より簡略化した例文においていくつかの場合分けを行い、その対比の中で分析することができる。

4.3. 文中に「全然」の現れる環境

一般的に、「全然」は「ない」のような明示的否定語と呼応して文中に現れると考えられているが、「ない」が含まれていない場合でも、4.2. で見たように日常言語においては自然な発話が頻繁に行われている。以下、「全然」の被修飾語の可能性を考察することで、「全然」の現れやすい環境と現れにくい環境があることがわかる。

- (24) a. 全然食べれます。 / b. 全然わかります。 / c. ?全然走ります。

(24c) においては、「全然」と「走ります」の結びつきは非常に不自然である。対話文を想定しても、(24c)の容認度を高めることは難しい。動詞においては可能・不可能を問う文脈が存在している方が容認度が高くなりそうである。加えて、形容詞においてははっきりした良し悪しの価値判断が伴うものの方が、容認度が高くなる傾向が存在している。

- (25) a. 全然良いです。 / b. ?全然四角いです。

また、数詞との共起は、明示的否定語を伴っていたとしても文脈を与えない限り不自然であり、また、完全な肯定文においては非文となる。²

(26) a. ?全然5人じゃありません。/ b. *全然3つです。

このことから、「全然」は量・程度と関連していることもうかがえると同時に、肯定文で用いられる場合には、可能・不可能を問う文脈、良し悪しの価値判断を必要とし、数詞とは結びつきにくい傾向にあると考えられる。また、関連の研究として、金水・工藤・沼田(2000: 114-115)において、「全然」の共起に関する言及がある。工藤は、陳述副詞と語彙的否定形式との共起という観点を設定し、「ぜんぜん」は「欠いている、能無しだ、無意味だ、無頓着だ、無感覚だ、無学だ、没交渉だ、未知だ、からっぽだ、失せる、忘れる、よす / 違う、異なる、かけ離れている / 間違っている、嘘だ、でたらめだ、反対だ、逆だ、別だ、他人だ / 駄目だ、下手だ、めちゃくちゃだ、小学生じみている / いい、平気だ」を挙げている。そして、語彙的否定形式のタイプを6つに分類し、「(I) 不可能、(II) 困難、(III) 欠如・消滅、(IV) 不一致、(V) 負の評価、(VI) 気にしない」という項目を設定している。なお、「ぜんぜん」は(III)から(VI)に共起がみとめられると工藤はしているが、実際には、(24a) や (24b) のような可能・不可能の要素と結びつく現象は非常に多いのが現状である。

4.3 対話を与える否定的文脈

対話における疑問文の種類、そしてそこに潜む否定性との関係から「全然」の容認度の揺れを見ることができる。以下のように文脈を与えることで、容認度に変化が生まれることがわかる。

<Bの肯定的共感をAが予測・期待する疑問文>

(27) A. 「この本、おもしろいでしょう？」

B. 「全然おもしろくないよ」

(28) A. 「この本、おもしろいでしょう？」

B. *「全然おもしろいよ」

<Bの否定的共感をAが予測・期待する疑問文>

(29) A. 「この本悪い評判ばかり聞いているけど、おもしろい？」

B. 「全然おもしろくないよ」

(30) A. 「この本悪い評判ばかり聞いているけど、おもしろい？」

B. 「全然おもしろいよ」

² 「全然」が修飾する対象の分類分けの必要性についての指摘は、岡本雅史氏（東京大学大学院情報理工学系研究室）によるものである。

(30)のBは、「あなたは私がこの本をおもしろくないと共感するだろうと、私の否定的共感を予測・期待しているかもしれないが、それはとんでもないことであって、私はこの本を大変おもしろいと感じているのです」という内容が「全然おもしろいよ」という表現となって現れていると考えられる。一方で、(27)のBに見られるような発話は、世代間の差や個人差もあるが、(30)に比べるとずっと容認度が下がり、非常に不自然である。

<AがBの否定的共感を予測・期待しない、中立的態度の疑問文>

(31) A. 「この本、どう？」

B. 「全然おもしろくないよ」

(32) A. 「この本、どう？」

B.# 「全然おもしろいよ」

このような用例は、現代の若者の日常言語において非常に頻繁に見られるため、一既に言語の表層レベルが否定疑問文を構成していなければならないというわけではないと言えることを示唆している。しかし、この(31)のBが容認されるような場合においては、相手の心的状況を話し手が想像する限りにおいて、否定的共感を求められていると感じていることが考えられる。

本稿は「全然」の歴史的変遷を研究主眼とするものではないが、純粋な量・程度表現としての「全然」の用法は夏目漱石の作品などにも見られ、例「のみならず自己の講義のうちにぜんぜん埋没している」夏目漱石「三四郎」このことは、現代の若者言葉において、必ずしもその使用場面に常に何らかの否定性が意識されていないと考えられるような場合と類似している。このように「全然」は用法の変遷を有し、肯定と否定の間を行きつ戻りつしている副詞であると言えるだろうが、やはり現代においては否定的文脈を求めがちであり、かといって他の「少しも」、「つゆさえ」、「めったに」などが求めるほど強く否定的文脈を求めているわけではないようである。

(30)のBの発話は、他のBの発話に比べれば、ずっと違和感が少なく、受け入れやすい。上の例を見ていくと「あなたはこの本をおもしろくないと感じていますよね？」という文脈を与えられたとき、換言すれば、否定的共感が期待されているときに、最もBの「全然おもしろい」という返答が自然に聞こえている。すなわち、「Aさん、あなたはこの本がおもしろくないという評判を聞いていて、私も同じように感じているのではないか」と思っているようだが、それはちがいます」という否定を強めるために「全然」を用いていると解釈できる。

この「全然」は、本がおもしろいかどうかを否定しているのではなく、対話における相手の意見への否定、反対、却下、拒否であると考えられることができる。ここにおいて、相手の意見の中に否定性があるときにのみ、容認度が高まっていることに注目が必要である。つまり、「あなたも私と同様に、この本をおもしろくないと感じているのではないか」という否定的共感を求める文脈が背後にあるときに最も「全然…肯定文」の容認度が高まる点

が興味深い。

Horn (1985, 1989) は、Metalinguistic Negation (メタ言語否定) について、命題の真理条件の内容を否定する Descriptive Negation (記述否定) とは否定の性質が異なっていること指摘し、先行発話の持ついろいろな要因、すなわち、前提、慣習含意や会話の含意、形態、スタイル、発音等がその否定の対象とされることを提示した。

"Negation does constitute in these cases a way of rejecting the language used by an earlier speaker, and is therefore indeed METALINGUISTIC;"

(Horn 1985: 134)

"... it is relevant that metalinguistic negation can be employed by a speaker who wishes to reject the bigoted or chauvinistic point of view embodied in an earlier statement within the discourse context:"

(ibid.: 133)

"METALINGUISTIC NEGATION---a device for objecting to a previous utterance on any grounds whatever, including the conventional or conversational implicata it potentially induces, its morphology, its style or register, or its phonetic realization."

(Horn 1989: 363)

メタ言語否定とは先行発話に異議反対を唱えるものであると Horn は指摘しているが、そうすると、この「全然」の用法は、Horn のいうところのメタ言語否定の一種、しかも、その背後に否定的共感の環境を求める特殊な一例であると考えられる。そして、このような否定的文脈を“at all”は求めていないという点が「全然」の用法との大きな相違点である。

4.4. 「全然」が現れる肯定文の環境

4.3.で概観したことを次のようにまとめることができる。

	A: おもしろいでしょう?	A: おもしろくないでしょう?	A: どう?
	AはBの肯定的共感を 予測・期待	AはBの否定的共感を予測・ 期待	Aの中立的 疑問
B: 全然おもしろいよ。	容認度低い	容認度高い	容認度低い
B: 全然おもしろくないよ。	容認度高い	容認度高い	容認度高い

このように考えると、「全然」は強い否定性を求めているわけではないが、明示的な否定辞を含まない場合であれば、対話している相手に否定的共感という否定的文脈を与えられたときにおいて、もっとも容認度が高くなるということが示された。

これらの現象から、「全然」を肯定文で用いることができる場合は、否定的共感の存在が

重要であることがわかる。(31), (32) のような中立的態度の疑問文の例においては、そこに否定すべき対象が文中にも先行する予想・期待にも存在していないために、肯定文では用いることが不自然となっていると考えられる。ただし、この否定的共感の存在は、相手か自分かどちらかだけが持ちうるものではなく、相手か自分か両方の可能性が考えられる。³岡本氏の指摘によれば、「全然」はそもそも文中の用言を否定するために用いられていたものであるが、現在では文の外、すなわち、先行発話の予想や期待、あるいは話し手の以前の予想や期待を否定するために拡張したと考えることが可能であり、それは実際の言語現象に即した分析であると言える。「全然」の使用は、文の中の要素、動詞や形容詞といった用言（その環境と結びつきの良し悪しについての詳細は 4.3. を参照）を否定するために用いられる場合があるのと共に、相手あるいは自分の持っている予想・期待に対して否定を行うために用いられる場合もあると統合できる。

4.5. “at all” が否定文以外で使用される場合の可能性

一般的に、“at all” は “not” のような文中の明示的な否定語と呼応して、用いられると考えられている。そして、2.2. で検証したように、“un-” や “dis-” や “-less” といった否定接頭辞や否定接尾辞とは呼応することができなかった。しかし、必ずしも明示的な否定語との呼応だけに使用が限られているわけではない。以下のような場合分けが可能である。⁴

[1] 条件節における使用

- (33) Kate: If it would be any help at all, you could practice on me. [Alf (1986)]
- (34) Willow: Oh. Well, if it helps at all, I'm gonna say yes. [Buffy the Vampire Slayer (1997)]
- (35) Kate McCrae: If there's any justice at all, the black hole will be your grave! [The Black Hole (1979)]
- (36) Sherry Balder: Oh, Dan, if you care anything about me at all, take me away. [Abilene Town (1946)]

[2] 疑問文における使用

- (37) Sydney: What, the fact that I saw it or just that it's there at all? [Alias (2001)]
- (38) Jess: Did you call me at all? [“Gilmore Girls” (2000)]
- (39) Sergeant Taggart: Why are you telling me this? What makes you think I have any interest in that at all? [Beverly Hills Cop (1984)]
- (40) Tubbs: Yes, can I help you at all? [The League of Gentlemen (1999)]
- (41) Sydney: What, the fact that I saw it or just that it's there at all? [Alias (2001)]

³ 「否定的共感」の考察については、岡本氏とのパーソナルコミュニケーションの中で貴重なコメントを多大に賜った。

⁴ “at all” の否定文以外での [1][2][3] 使用の存在については、岡本氏のご指摘による。それに伴い [4] は有光が分類を加えたものである。<http://us.imdb.com/> での検索から例文による裏づけを得た。

[3] 驚きを表す文の従属節における使用

- (42) Bernard Black: I'm a quitter. I come from a long line of quitters. It's amazing I'm here at all! [Black Books (2000)]
- (43) Ray Barone: [after talking to his parents] You know, it's amazing I can function at all. [Everybody Loves Raymond (1996)]
- (44) Marjory Frobisher: I was surprised to hear she'd got married at all. I mean she wasn't very attractive was she? ["To the Manor Born" (1979)]

[4] "without," "luck," "any"等否定的概念を有する語との共起による使用

- (45) Guido: I thought my ideas were so clear. I wanted to make an honest film. No lies whatsoever. I thought I had something so simple to say. Something useful to everybody. A film that could help bury forever all those dead things we carry within ourselves. Instead, I'm the one without the courage to bury anything at all. When did I go wrong? I really have nothing to say, but I want to say it all the same. [8½ (1963)]
- (46) Jack Wilde: [voiceover] While both sides have valid points of view, the producers of 'She Spies' wish to state that we take no stand whatsoever on the issue of animal testing, as we lack the moral fiber to take a strong position on anything at all. [She Spies (2002)]
- (47) SpongeBob: [sings to cheer up and encourage Plankton] 'F' is for friends who do stuff together, 'U' is for you and me, 'N' is for anytime or anywhere at all, down here in the deep blue sea! Now you try! [SpongeBob SquarePants (1999)]
- (48) Austin Powers: ...anything at all. [Austin Powers: International Man of Mystery (1997)]

これら [1]、[2] の使用環境は、3.2.で取り上げた太田の説く否定的文脈と矛盾しない。また、[3] の使用環境については、有光 (2000) において、驚きや予想外などの概念が非明示的否定性と関連していることが指摘されている。驚きや予想外という概念は明示的な否定語・否定辞を有しないので非明示的否定性の一つであると位置づけられる。[4] は "without," "luck," のように価値的な否定性が含まれている場合であり、そこに "any" という代表的な NPI の一つが共に用いられることもあれば、また、単独で "at all" と呼応して用いられることさえも可能となっている。このように "at all" は多様な否定性に呼応しうるものであるが、そのふるまいは日本語の「全然」と重なりあいながらも異なる部分を多く含んでいる。

4.6. 一語返答に見られる “at all” と「全然」の相違点

これまで、“at all” には見られることのない、「全然」の特殊なふるまいに焦点を当ててきた。また、“at all” が明示的な否定文以外において用いられる可能性があることについても概観した。次は、一語返答という対話の形式に注目し、それぞれの現象を分析する。

まずは、ごく表層的な論点となるが、英語の “not at all” という成句には、一成句それだけで、自然に用いられる身近な例がある。しかし、“at all” という返答はない。

(49) A. "Thank you very much for your kind advice."

B. "Not at all." / *"At all."

(50) A. "I feel really sorry to have bothered you."

B. "Not at all." / *"At all."

(51) A. "Thank you."

B. "Not at all." / *"At all."

この場合のいずれも左の B は明示的に何も否定する対象を自らの文中には持っていないが、これらは日常頻繁に行われる会話で、不自然さはない。

(50) においては、それが自分にとって少しも “bother” ではなかったというための否定であることは、皮肉を言おうとしているような場合を除くと、非常に容易にわかる。また同時に、あなたは “sorry” と感じていない、という点について、否定しようとしているわけではないことも明らかである。

(51) では、「あなたが “Thank you.” と感じている、何か私がかかわった対象は、あなたが “Thank you.” と感じるような対象では全くない」という否定であろうことが、皮肉などの特別な意図を除き、明らかである。この場合、“not” の否定しているものは何かと意識的に解釈をしないほどに、「どういたしまして」という応対はほとんど慣習化している。

しかし、“not at all” の成句としての一語返答は存在するものの、“at all” には「全然…肯定文」のような、対話における相手の意見への否定、反対、却下、拒否を行うような否定的共感を求める肯定文との用法はない。

一方、「全然」の一語返答に見られる状況は以下のとおりである。

(52) A. ご親切なご助言をありがとうございます。

B. いえいえ、全然、いいですよ。 / *全然。

(53) A. ご迷惑をおかけして、本当に申し訳なく思っています。

B. いえいえ、全然、いいですよ。 / *全然。

(54) A. ありがとう。

B. いえいえ、全然、いいですよ。 / *全然。

日英語の対照研究において、全てをパラレルに分析しようとするのはナンセンスである。

例えば、"not at all" が「全然～ない」と慣習的に訳されているからといって、「全然～ない」は "Not at all." のようないわゆるひとまとまりの成句ではなく、その間に単語や文章が入ることを求める。それぞれ全く体系の異なる言語を照らし合わせて比較していることによる、ふるまいの差異が存在しても何ら不思議なことはないと切り捨ててしまうようなスタンスよりも、このような一語発話の例を分析するのにあたっては、そういった対照研究にまま見られる存在しても不思議のない差異を認めつつ、より根源的な相違を照らし合わせるの方が興味深いと思われる。

では、(52), (53), (54) で見たように、「全然」の一語返答の例が存在しないかとなると、そのようなことはなく、われわれは日常的に会話の中で多用している。ただ、その用法については、上で見てきたのと同様にいくつかの分類が可能であるようだ。また、容認されるにしても意味的に肯定・否定がゆらぐ場合がある。

<B の肯定的共感を A が予測・期待する疑問文>

- (55) A. 「今日、たくさん魚釣れたでしょう？」
 B.* 「うん、全然」
 (56) A. 「今日、たくさん魚釣れたでしょう？」
 B. 「ううん、全然」(全然釣れませんでした、の意のみ)
 (57) A. 「今日、たくさん魚釣れたでしょう？」
 B. 「全然」(全然釣れませんでした、の意のみ)

<B の否定的共感を A が予測・期待する疑問文>

- (58) A. 「今日、やっぱり魚釣れなかったでしょう？」
 B. 「うん、全然」(全然釣れませんでした、の意のみ)
 (59) A. 「今日、やっぱり魚釣れなかったでしょう？」
 B.# 「ううん、全然」(上昇調で、そんなことはありません。釣れました、の意にも)
 (60) A. 「今日、やっぱり魚釣れなかったでしょ？」
 B. 「全然」(1. 釣れませんでした。2. そんなことはありません。釣れました。)

<A が B の否定的共感を予測・期待しない、中立的態度の疑問文>

- (61) A. 「今日、魚釣りどうだった？」(釣れた量を尋ねているという文脈で)
 B. 「うん、全然」(全然釣れませんでした、の意のみ)
 (62) A. 「今日、魚釣りどうだった？」
 B.* 「ううん、全然」
 (63) A. 「今日、魚釣りどうだった？」
 B. 「全然」(全然釣れませんでした、の意のみ)

まず、(55) から (57) においては、A が肯定的共感を B に期待している。そこで、B の

返答として三種類のパターンを想定した。「全然」は「全然釣れませんでした」の意でしか用いられることができておらず、「うん、全然」の用法は非常に不自然となる。

次に、(58) から (60) においては、A が否定的共感を B に期待している。先の例と同様に、B の返答として三種類のパターンを想定した。ここで興味深いのは、「うん、全然」における「うん」は「あなたの求めている否定的共感のとおりです」を意味する「うん」であるという点である。そして、「ううん、全然」においては、「あなたの求めている否定的共感は誤りであり、私はそのような否定的共感はできない。私はあなたの心的状況を訂正したい」という態度表明として「ううん」が用いられている。その結果として、相手の予測・期待を否定、反対、却下、拒否することを目指している。加えて、この「ううん、全然」については、強い上昇調とアクセントが必要となり、この要素なしには、容認度が非常に低くなる。強い上昇調とアクセントによって、相手の心的状況に対して「訂正」を求めていることが伝わる場合に、この発話は「そんなことはありません。釣れました」の意として用いることができています。また、「うん」も「ううん」も伴わない「全然」だけの用例においては、やはり上昇調とアクセントを含む発話のマナーによって、その意味が「釣れませんでした」と「そんなことはありません。釣れました」の間で揺れている。

最後に、A が B の否定的共感を予測・期待しない、中立的態度の疑問文である (61) から (63) においては、「うん、全然」の「うん」は釣れたか釣れなかったかの肯定否定ではなく単なる相槌の機能に終始している。(62) に見られるように、中立的態度の疑問文に対して「ううん、全然」と返答するのは極めて不自然である。しかしながら、注目したいのは、(57) における B の一語返答である「全然」が、全くの揺らぎなしに「全然釣れませんでした」を意味するという点である。

ここで、「うん、全然」と「ううん、全然」について、以下のようにまとめられる。

「P ～ か？」(例:「釣れたでしょ?」)であれば、「P?」であるから、

うん=P、*全然 (P)

ううん=¬P、全然¬ (P)

また、「P= 釣れた (肯定命題)」と定め、「P ～ ない？」(例:「釣れなかったでしょ?」)を「¬P?」と表わすことにすると、

うん=¬P、全然 (¬P)

ううん=P、全然¬ (¬P)

対話における「全然」は、命題内容を否定しようとするものと、相手の発話自体を否定しようとするものがあるといえる。ただし、いずれの場合にも、どこかに一が存在していることが必要である。言い換えれば、何らかの否定的文脈を求めているのである。また、B の一語返答である「全然」が、肯定か否定かの意味の間を、全くの揺らぐことなく、「全然釣れませんでした」という強い否定を意味するところに落ち着くことは、川端 (1983) が、「全然」を、「つゆさえ、少しも、ちつとも、めったに、ほとんど」などと並べて取り上げ、否定辞と呼応する陳述副詞としてひとくくりをしていたことと矛盾しない。しかし、やはり「全然」は他にここに挙げられているような副詞とは異なり、より多用な否定的文

脈を求めていると言えるということは、これまで見てきたさまざまな現象により明らかである。

4.7. 「全然」とアクセント、上昇調の有無

アクセント等によって肯定的表現となるか否定的表現となるかが変わる副詞もあることは知られている(太田 1980: 441)。上で見たように「全然」もそういった副詞の一つである。ここでは、否定的共感を求められているような否定的文脈において、アクセント、上昇調の有無を場合分けして、肯定・否定の意味がどのような揺らぎを見せるか、分析する。

<「全然」アクセントなし、下降調>

- (64) A. 「今日、たくさん魚釣れたでしょ？」
 B. 「全然」(アクセントなし、下降調)(全然釣れませんでした)
 (65) A. 「今日、やっぱり魚釣れなかったでしょ？」
 B. 「全然」(アクセントなし、下降調)(全然釣れませんでした)
 (66) A. 「今日、魚釣りどうだった？」
 B. 「全然」(アクセントなし、下降調)(全然釣れませんでした)

<「全然」アクセント、上昇調>

- (67) A. 「今日、たくさん魚釣れたでしょ？」
 B. 「全然」(アクセントと上昇調)(そんなことはありません。全然釣れませんでした)
 (68) A. 「今日、やっぱり魚釣れなかったでしょ？」
 B. 「全然」(アクセントと上昇調)(そんなことはありません。釣れました)
 (69) A. 「今日、魚釣りどうだった？」
 B. 「全然」(アクセントと上昇調)(全然釣れませんでした)

上記のペアを比較して発音すれば、意味と容認度に関する違いが明らかである。Bの否定的共感を予測・期待するAからの疑問文に対して、BがAから予測・期待される否定的共感を拒否したいのであれば、その場合には強いアクセントと上昇調が非常に重要となってくる。

4.8. 否定疑問文に対する日英の返答のふるまいの相違点⁵

- (70) A. 「緊張しなかった？」
 B. 「全然」(全然緊張しなかったよ。)
 (71) A. 「緊張しなかった？」
 B. 「うん、全然」(全然緊張しなかったよ。)

⁵ 否定疑問文の観点から「全然」と“not at all”を考察することによる日英差の検討は、岡本氏の指摘による。

- (72) A. 「緊張しなかった？」
 B. 「いいや、全然」(全然緊張しなかったよ。)
- (73) A. "Didn't you get nervous?"
 B. * "At all." / B. * "Yes, at all."
- (74) A. "Didn't you get nervous?"
 B. "No, I didn't."
- (75) A. "Didn't you get nervous?"
 B. "Not at all."

否定疑問文において、日本語では「うん、～ではなかったよ」、「いいや、～ではなかったよ」と肯定語と否定語、どちらを最初に置いて返答することも可能であるのに対して、英語では "No, I didn't." や "No, not at all." というように否定語を最初に置いて返答することが一般定である。(71) A. 「緊張しなかった？」 / B. 「うん、全然」において、Bの「うん」は「緊張しなかったこと」という事態そのものを本人が肯定的に認めているものである。それに対して、(72) A. 「緊張しなかった？」 / B. 「いいや、全然」と言った場合には、「あなたは私が緊張したのではないかと思っているようだが、それは違います」という相手の予想・期待に対して否定をするためにまず「いいや」と否定語を用いているのである。このように、日本語が「うん」、「いいや」の両方を態度表明によって使い分け可能であるのに対して、英語では、否定疑問文への "At all." や "Yes, at all." といった返答は非文となる。英語においては、相手の考えを訂正するという目的の元に "No, I didn't." や "Not at all." といった否定表現が用いられており、この "No" や "Not" は相手の予想・期待への否定というスコープを有している。それに照らすと、日本語の返答は結果的に「緊張しなかった」という意味を持つ点では同じものの、「うん」と「いいや」はそれぞれ異なるスコープを有しており、「うん」は事態そのものの肯定的認識であり、「いいや」は相手の予想・期待への否定の表れであると言える。

5. 結語

本稿は、英語の "not at all" と日本語の「全然～ない」を照らし合わせ、それぞれを多用な否定的文脈の中で分析した。"at all" と「全然」、あるいは "not at all" と「全然～ない」は、それぞれ否定性に対して敏感な要素でありながらも、かなり異なった現象を有していることについて論じた。特に現代の若者言葉による対話において使われている肯定文に見られる「全然」について、その否定的文脈の根源を探究した。その結果、「全然」は "not at all" ほど強く否定的文脈を求めているとはならず、歴史的には純粋に肯定的な量・程度表現として用いられていた経緯を含みつつ現在まで変遷を経ており、対話例に見られるような相手の否定的共感といった否定性が存在する文脈において、肯定文の中の「全然」が自然で容認度が高い用法となっていることを指摘した。日常言語の否定性は実に多様であり、「ない」や "not" といった明示的な否定語を文中に含む否定文、「非、不、未、無」や "un-, in-,

non-, dis-”といった明示的な否定接頭辞を含む否定的な語、そういった明示的否定性に対して、比較構文、If 節、Before 節、事実と反する仮定などの否定の文脈といった、明示的な否定語・否定辞を含まない様々な非明示的否定性が存在している。本論文では「全然」と “at all” を手がかりにして、否定的共感という非明示的否定性の一部の解明を行った。対話の中で、非明示的否定性と呼応している「全然」は、その命題に関する否定と呼応しているのではなく、相手の発話に潜んでいる自らに対する否定的共感への予測や期待を、否定、反対、却下、拒否するという否定的態度と呼応しているといえる。「全然」は明示的な否定辞とだけ呼応するのではなく、相手の期待や予測における非明示的否定性とも呼応しており、その一種が否定的共感を求めることによって生じている否定的文脈であると言える。また、否定疑問文における日英語の相違点についても、“at all” と「全然」を手がかりに、その背景にあるメカニズムをさぐることができた。このように “at all” と「全然」を照らし合わせて分析することによって、従来の研究で見過ごされてきた否定的共感という概念を否定的文脈として扱うこととなり、これらの NPI のユニークな現象から、日常言語における否定性の一端を明らかにすることを試みた。

- ＊ 謝辞：本稿の執筆にあたり、岡本雅史氏（東京大学大学院情報理工学系研究室）に多大なるご助言とコメントを賜った。ここに厚く感謝申し上げるものである。

参考文献

- 有光奈美 (2000). 「肯定文における否定性―認知語用論の観点から」, 京都大学人間・環境学研究科, 修士論文.
- 有光奈美 (2001) 「非明示的否定性と呼応する程度副詞『全然』」, 日本語用論学会第4回大会予稿集 pp. 128-135.
- Givón, Talmy. (1979). *On Understanding Grammar*. New York: Academic Press.
- Bolinger, Dwight. (1977). *Meaning and Form*. London: Longman.
- Grice, Paul H. (1975). "Logic and Conversation." in Peter Cole and Jerry Morgan (eds.) *Syntax and Semantics*, pp. 41-58, New York: Academic Press.
- Horn, Laurence R. (1970). "Ain't it hard (anymore)." *CLS*, Vol.6, 318-327.
- Horn, Laurence R. (1985). "Metalinguistic Negation and Pragmatic Ambiguity." *Language*, Vol.61, pp.121-174.
- Horn, Laurence R. (1989). *A Natural History of Negation*. Chicago: The University of Chicago Press.
- 川端善明 (1983). 「副詞の条件―叙法の副詞組織から―」, 渡辺 実 (編)『副用語の研究』,

- pp. 1-34, 東京: 明治書院.
- 金水 敏・工藤真由美・沼田善子 (2000). 「時・否定と取り立て」岩波書店.
- Langacker, Ronald W. (1990). *Concept, Image and Symbol*. Berlin/New York: Walter de Gruyter.
- Leech, Geoffrey. (1974). *Semantics: The study of meaning*. London: Penguin Books.
- Nakamoto, Kohichiro 1994. A Study of Temporal Adverbs: Their Temporal and Non-Temporal Uses. M.A. Thesis, Sophia University.
- 太田 朗 (1980). 『否定の意味』, 東京: 大修館書店.
- 高水 徹 (1999). 「日本語の量・程度表現に関する認知言語学的分析」, 京都大学人間・環境学研科, 修士論文.
- 田中廣明 (1998). 『語法と語用論の接点』, 東京: 開拓社.
- van der Wouden, Ton. (1994). *Negative Contexts*. Ph.D. Dissertation, University of Groningen.
- 山梨正明 (1995). 『認知文法論』, 東京: ひつじ書房.
- 山梨正明 (2000). 『認知言語学原理』, 東京: くろしお出版.
- 吉村あき子 (1999). 『否定極性現象』, 東京: 英宝社.